

タブロイド地域紙「市民プレス」第73号(2016/7/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

## 目次

PAGE 2	武蔵野台地の小さな街の記憶	その一	プロローグ
PAGE 4	遺跡が教える古代の暮しは・・・	石器時代を経て	縄文時代へ
PAGE 6	「縄文海進」と貝塚	PAGE 7	「奥東京湾と貝塚の分布」
PAGE 10	土器が発明されて	PAGE 11	武蔵野台地の鳥瞰図
PAGE 13	「火焰土器」の発見は・・・	PAGE 16	志木市内の主な縄文土器編年表
PAGE 17	土器の展開を「編年」で迎える	PAGE 26	埋蔵文化財包蔵地の分布
PAGE 27	日本列島の総人口は・・・	PAGE 29	最近の詳細な調査・・・
PAGE 37	付録 関東の縄文標式遺跡	PAGE 39	付録「火焰型土器」の特徴

## 武蔵野台地の小さな街の記憶

### その一

#### プロローグ

武蔵野台地の先端部に位置する「志木市」は小ぢんまりとした市まちである。その面積は、全国的に見て最下位に近い(下から七番目)。川かわのまちまちと呼ばれる志木市は、狭山丘陵を水源とする柳瀬川が北側を流れ、川越を発した新河岸川と志木市役所付近で合流する。さらに南下して都内に入ると、名称は「隅田川」となる。一方、志木市の東側は、荒川の水路を境界として、「さいたま市」に接している。

六千年の古いにしへえに遡って、発掘された遺跡から推理すると、市内の各所に、少なからざるヒト(縄文人)が居住していた。考古学上、縄文時代と呼ばれ、海面が上昇して、現・東京湾は北方に「奥東京湾」を形成した。なお、縄文とは、このころ出現した土器に縄目の模様が刻印されていたことに由来する。

さらに、西暦紀元の前後にわたって「弥生時代」（弥生式土器に由来する）となり、紀元後となつてはば二千年、古墳の時代から、奈良時代、平安時代、さらに鎌倉時代から中世・近世（江戸時代から明治維新に至る）を経て今日まで、人々の街づくりは途切れずに進められた。

このような発展的な展開は、それぞれの時代の遺構や遺物が市内の各所から発掘されていることから確かめられ、疑いの無いところである。そして現代に至り、首都東京に近接するため、ベットタウンとして人気が高くなる。大型の集合住宅が続々と建設され、合わせて医療・福祉施設のプロジェクトも急増し、転入する新規の市民は一途に増加しつつづけている。

地域の歴史を紐解いて古きを知り、新規の市民が、そして旧市民も、かつての繁栄の記憶を甦らせ、これを糧として、新たな活力の創出に結びつくことを目標として「小さな街の記憶」を語ることにしたい。郷土の歴史から始まる、公刊の『志木市史』ほか、多くの郷土資料がすでに知られているので、屋上に屋を架すのでは、との誇りは免れない。しかし、Ⅱ郷土史Ⅱという、古いイベントのみを扱うことが通例で、近年の、そして現代の記述に及ぶことは無かった。対する本稿では、明治・大正・昭和から平成へと、大きな変革と進展が見られた近年のイベントにも力点を置くこととした。

また、これまでの郷土史には、しばしば、口伝え、所謂「伝承」「伝説」が強調され、虚構、フィクションも登場し、それらは歴史に彩りを添えはしたが、その行き過ぎが批判された事例も少なくなかった。一方、本紙では、確かな証拠や記録、絵図などを基底として、真実のストーリーに迫ることを心掛けた。

古えから現代にまで至る、ノンフィクションの「武蔵野台地の小さな街の記憶」を、本紙の連載として辿ることにしたい。

## 遺跡が教える古代の暮しは・・・

### Ⅱ 石器時代を経てⅡ 縄文時代へ

一・一 「旧石器時代」には・・・

近年、志木市内の各所で、精力的な調査が行われ、多くの貴重な遺跡が発掘された。そのうち最古のものは、現代を遡ること凡そ三千年前のもので、考古学では「旧石器時代」といわれる。著しく寒冷だった時代で、海面は今日より百米も低かった。それから二万五千年位い前まで、志木市の東部（現・宗岡帯）は、川の流れて谷が刻まれ、河原には石が敷き詰められ

ていた。そこから遙かな西方を見上げると、ローム層（火山灰が風化・堆積して赤い粘性の土）の台地が広がり、野獣を見付けて狩猟によって暮す人たちが生活する場となっていた。

## 1.2 縄文土器の時代へ

最寒冷期を記録した、一万九千年前から地球規模で温暖化に向かう。環境の変化が短期間のうちに起こり、人々は定住することを始めて、食料を煮たり貯蔵するための土器が出現した。

それらには共通して縄文（縄目の文様）が見られたので、「縄文土器」と呼ばれ、石器時代に続く時代区分として、「縄文時代」の名称が定着した。

海面が上昇して海水が侵入し、現在の東京湾は北に「奥東京湾」を形成し、さらに北上して東西に二分され、紀元前六千年ころになると、西側の入江は川越近くまで入り込む。縄文海進」と呼ばれ、海面は三メートルくらい上昇して、現・柳瀬川の流域は「古人間湾」と呼ばれる水域と化した。志木市の東方に当る宗岡地区は海面下に沈み、志木地区との境界は海岸となる。

気温は今よりも一、二度高く、温暖な気候のため、湧き水や海産物が豊かな丘陵の崖線には人々が好んで集まって居住した。志木市内の発掘調査によって、多数の縄文時代住居が発掘

され、遺跡からは、多種多様な縄文人の遺物が出土している。特に、この時代の人々が食べたあと捨てた貝殻などが、「貝塚」として残され、重要な遺跡となっている。

### 1.3 「縄文海進」と貝塚

次頁の図には、北上した「奥東京湾」がさらに「古人間湾」を形成する地形と、沿岸に残された「貝塚」の位置が示されている。

国内で発見された「貝塚」は二千五百個余りだが、ほぼ半分が関東地方に、しかも全体の四分の一近くは、東京湾の東沿岸、特に千葉の海沿いに集中している。

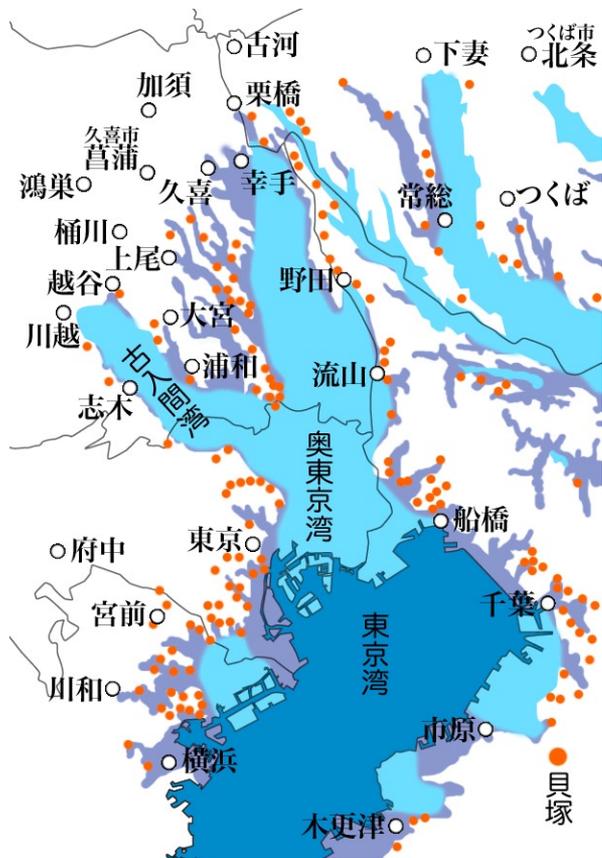
志木市には、現・志木中学校沿いの道路際（柏町四丁目）の斜面に「城山貝塚」が所在している。「城山」とは、この辺り一帯の字の名前で、周辺で縄文前期後葉の住居跡が発掘されたので、この貝塚は、前期中葉（約六千年前）のものとして推定されている。この貝塚は、何時でも目前にすることができ、志木市内最古のモノUMENTとして極めて貴重である。

発掘調査が行われ、縄文人の遺物として、ヤマトシジミ・マ



城山貝塚

平成二年に目印に標識柱が立てられた



大正時代に始まった、海岸線の変化についての研究（鳥居竜蔵、大正十年）を基盤として、東木龍七は、「地形と貝塚分布から見た関東低地の旧海岸線」を地図上に示した。（参考資料：法政大学地球研究会ブログ）

ガキ・ハマグリなど、合わせて十一種類の貝類が確認された。平成二年に立てられた志木市の史跡案内板によれば、淡水系の貝を主体とする縄文海進の最盛期に形成されたものと推息されている。

市内には、その他にも、幾つかの貝塚が確認されたが、農地として耕作され、或いは発掘・調査後に埋められて、地表には残されなかった。

一・四 城山の対岸に「水子貝塚」がある・・・

志木市の城山貝塚は規模が小さいが、その北には、もつと規模の大きな貝塚、「水子貝塚」が所在する。縄文時代には、海進によって、現在の柳瀬川に沿って入江が形成されていたので、「水子貝塚」の位置は、丁度、城山の北に当る対岸となる（「水子貝塚」と「城山貝塚」との関係図＝十一ページを参照）。

規模の大きな「水子貝塚」は、縄文時代前期（5,500



水子貝塚の全景

（6,000年前）の代表的な貝塚として、昭和四十四年、国の史跡に指定される。

貝塚と古えのムラを保存するために整備され、約四万平方メートル、周囲に全長約六百メートルの園路をもつ史跡として、「水子貝塚公園」がつくられた。公園内には「竪穴住居」が復元され、そのうちの二棟には、当時の居住生活の様子が再現された。また、「水子貝塚公園資料館」が開館して、埋蔵されていた資料の多くが収納、展示されている。

#### 一・五 縄文時代の土器は・・・

良く知られているように、明治十年（1877）、アメリカの生物学者モース（Edward Silvester Morse）が横浜から新橋に向かう汽車の中から貝塚を見つけた。この「大森貝塚」から出土した土器を、彼は報告書の中で「Cold Marked Pottery」と呼んだ。その訳語が索紋、縄紋などを経て

復元された住居の内部



水子貝塚公園

ようやく「縄文」に落ち着いたのである。縄文土器の発見の糸口となった大森貝塚は、JR京浜東北線・大森駅近くにあつて、遺跡庭園として整備され、線路脇には記念の碑が建っている。

縄文土器は北海道を除く日本各地で出土しているが、もつとも古いものは、AMS法（極微量の天然レベルの放射性炭素<sup>14</sup>Cを高感度で計測する技術）で測定した値を暦年代に補正すると、約一万五千年前となる。土器は世界各地で発見されているが、どれも一万年をわずかに越える程度の古さなので、素焼きの「縄文土器」は世界最古の土器ということになる。日本列島で何故、世界の何処よりも早く土器作りが始まったのか、その理由は解明されていない。

#### 一・六 土器が発明されて・・・

石器や木製の器は本来形のあるものを加工して生活に供したもので、「自然物」だが、土器は人類が形の無いものから造形した最初の発明品であり、「人工物」といつてよい。最古級の（「草創期」の）土器には煤や滓が附着していることが多く、煮炊き用であった。

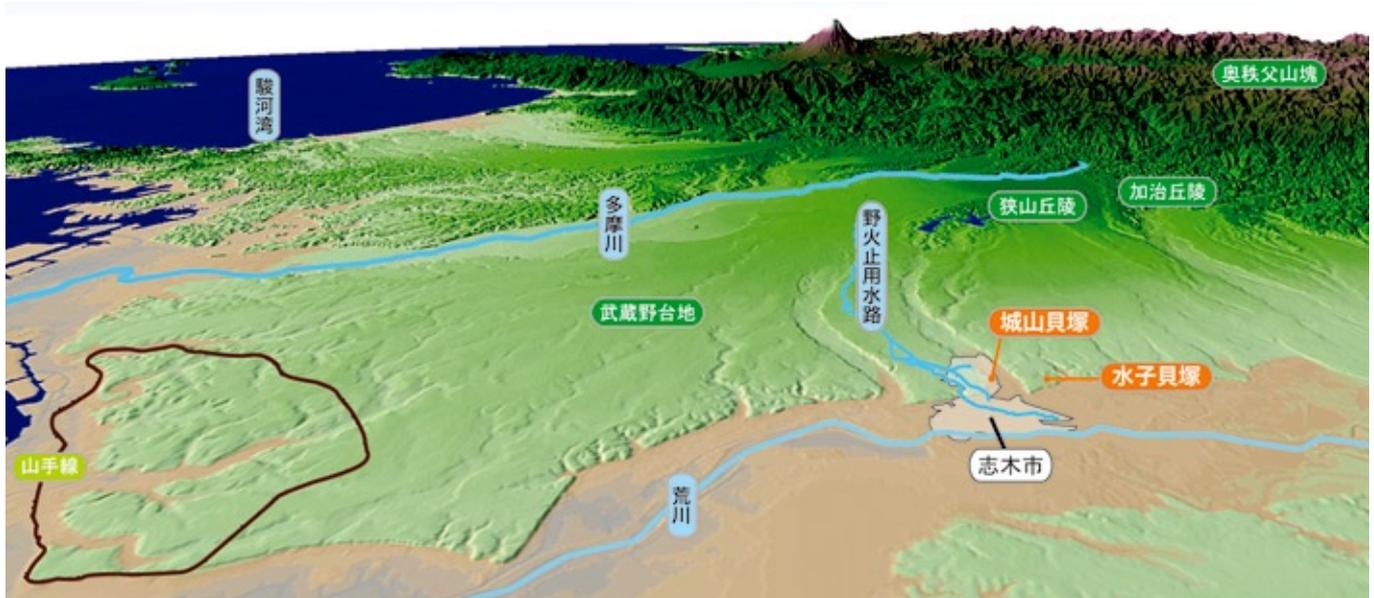
狩猟で得られる動物性の食料に加えて、婦女子でも可能な、植物性の木の実や根茎の採集によって、一定の土地への長期の滞留を促し、やがて定住生活に移行した。土器による煮炊きは欠かせないものとなる。

現在の柳瀬川は縄文海進のころは古入間湾、  
古入間湾の対岸に所在していた・・・  
「水子貝塚」と「城山貝塚」



## 武蔵野台地の鳥瞰図 (CG)

志木市の上空から西方向を望む



野火止用水は、戦後間もなく、志木市内に入って  
暗渠となり、雨水の下水路に変わる

縄文人は、「竪穴式住居」に居住して狩りや漁を  
行い、木の実を採集して暮らしていた。この頃の主  
食はどんぐりだったが、そのままでは苦くて食べられ  
ないために、すり潰してから煮ることによってアクを  
抜いたのでは、と推測されている。

草創期の土器は細い紐状の粘土を巻き上げて作つ  
たため、底が丸いかあるいは尖っているものが多く、  
装飾はほとんど無かった。石で抑えるか、土に埋めて、  
煮炊きをしたと考えられる。

「隆起文系」と呼ばれる形式では、細かい粘土紐  
を何段にも貼付けて器面の装飾とする手法が使われ  
た。さらに、器面に爪の形の連続分をもち爪や籠を  
押し付けた「爪形文系」の土器が現れる。また、「多  
縄文系」の土器には、縄を器面に押し付けて縄目をつ  
ける場合と、縄を回転させて縄文をつける場合が

あり、左撚りと右撚りの区別があつて多様となる。

縄文時代の「早期」になると、輪型にした粘土を積み上げて成型するようになり、そのとき表面に縄を当てる転がすと、輪と輪の繋ぎ目が塞がれるため、ごく自然に縄の文様が付く。これが「縄文」土器の名称の由来である。

縄文人はその後、意図的に装飾を施すようになる。始めは細い棒のようなもので幾何学的な文様を描いていたが、中期になると、粘土を貼り付け立体感を生む技法が広がって、創意に富んだ文様が次々に取り入れられた。

その極め付きは「火焰土器」であろう。縄文時代中期を代表する土器の一種で、燃え上がる炎を象つたかのような形状の土器を指す通称名である。装飾的な縄文土器の中でも、特に装飾性が豊かな土器である。

### 一・七 「火焰土器」の発見は・・・

新潟県の南部、十日町市の信濃川右岸段丘上に位置する笹山遺跡から、1980年～1986年にかけて実施された調査によって出土した、指定番号1の代表的な火焰土器（火焰型土器とも）に「縄



通称・「縄文雪炎」  
ゆきほむら

文雪炎」との愛称が付けられ、国宝に指定された。

現代美術のバイオニア、岡本太郎は、昭和二十五年（1951）、偶然立ち寄つた国立博物館で、「火焰土器」を目にする。そして衝撃を受け、絶賛したのであった。

「現代人の神経にとつてはまったく怪奇だが、この圧倒的な凄みは日本人の祖先が誇つた美意識だ」。翌年太郎は縄文土器論を発表。当時考古学の二資料に過ぎなかつた縄文土器に、高い芸術性があることを世に知らしめたのであった。左下の図は、「縄文土器論」美術雑誌『みずえ』1952年刊）より。

### 一・八 多様な縄文土器

粗製深鉢形、精製深鉢形、浅鉢形、有孔罅付土器、注口土器、火焰土器などが知られる。口が広くて深い形のものも多く、これを「深鉢形」といい、約二万年もの縄文時代を通して、基本形であった。スープやシチューのように、蒸発はせず、食物をじっくり煮るのに都合が良かったためとされ、出土した土器の表面が赤く変色し、煤がついたものも多い。



縄文土器を理解するために・・・

長年月の間に土器の形は変化したが、その流れを系統的に整理しようという努力が積み重ねられて来た。遺跡から出土した土器の「形態」とともに注目されたのは「文様もんよう」である。

その基準を定めるために、考古学上で定められた「標準遺跡」（又は「基準遺跡」）から発掘された土器を「標準土器」（又は基準土器）として選り、年代を比定する、というプロセスが提案され、既に定着した。なお、縄文遺跡は関東地方に密集しており、大部分の「標準遺跡」は現・東京都一帯から選ばれている。

標式遺跡 (type site) あるいは標準遺跡 (standard site) は、考古学上の、遺構、遺物又はその一連となる関連性の集合として定義される特定の型式、形式、様式、あるいは、年代、文化期、文化層の命名、簡単に言えば時期区分名命名の契機を与えた遺跡、あるいはその基準となる遺構、遺物が検出された遺跡自身のことをいう。

縄文時代の区分は六つ

前記の「標準土器」という指標で区分され、承認されたるに到つたのは、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という区分である。

志木市内の主な縄文土器編年表

出土した遺跡	土器の形式	区分	今からX年前
中野山道邸 城山道邸 新邸 西原大塚 田子山 市場裏	(出現期土器郡)	草創期	13000
	(隆起線文系)		
	爪形文系		
	多縄文系 燃系文系	早期	10000
	夏島 荷原 稲荷 稲輪 稲花 台		
	貝殻・沈線文系 田戸下層		
	条痕文系	前期	6000
	野島 鶴ヶ島 茅打 下吉		
	羽状縄文系 花積下 関黒 層山 浜		
	諸磯 浮島・興津	中期	5000
	十三善提 五領ヶ台		
	勝坂 阿玉台		
	曾利 連弧文 加曾利 E	後期	4000
	称名寺		
	堀之内		
加曾利 B	晩期	3000	
安行 1・2			
安行 3	晩期	3000	
千網			
	時代生	2300	

「土器編年」とは？

一方、文字も無かった時代なので、土器が制作された実年代・絶対年代は分らないので、「土器編年」という概念で年代を論議することになった。

この土器の年代は、それより古い、いや新しい、という相対的な、しかも曖昧な推定である。しかし、編年という概念によって、時間の物差しができ、例えば、同じ時期に、同じ型式の土器が分布する地域と、別の型式が拡がる地域の時代区分の論議などは容易になる。

また、土器の地域差は方言に例えられる。違っていたり、似ていたり、縄文土器にも地域による違いや類似性が見られる。そして地域性と、変化の流れの系統を合わせて調べることによって、土器の型式の動きと、その背景となる人の動きとを知る手掛かりが得られるという。

#### 一・九 縄文人の動向を探る

志木市内では、中野・城山・中道・新邸・西原大塚・田子山・市場裏遺跡から出土した土器などによって縄文時代の区分が比定され、それぞれの遺跡で活動した人の動きを推測する努力が続けられた。

#### 土器の展開を「編年」で辿る

志木市当局の遺掘・調査はすでに半世紀にも及ぶ。前頁に掲出した「縄文土器編年

表」によって、その成果を考察することにしよう。この表の文様と形式を示す「土器の形式」では、特に土器の「文様」に注目したい。

◇約13,000～10,000年前の草創期は、日本列島が大陸から離れる直前だったと推測されている。気候は短期間に寒暖が起こり、環境の変化は激しかったようだ。しかし、やがて温暖化が進み、氷河が溶けて海水面は上昇して、海が陸地に侵入する。「海進」といわれる。

貝類や魚類が新しい食料となったが、狩猟の獲物は、象や野牛などの大型哺乳動物から中小の哺乳動物、鹿や猪などに変わっていった。

#### 「縄文章創期」の志木市内では・・・

平成四年（1992）に発掘調査された「城山遺跡」から、爪形文系土器一点が出土し、同六年の発掘では、多縄文系土器三点、爪形文系土器一点が発見された。また、平成十年（1998）には、「田子山遺跡」で有茎尖頭器一点が出土した。

「有茎尖頭器」は、有舌尖頭器ともいい、先端を鋭く尖らせた槍先形の打製石器で、基部に茎なかじ＝刀身の柄の部分なみじをもつ。

「爪形文系土器」は、土器の表面に貼付けた粘土の紐に爪または爪形様のものを押し当てて

模様としたものである。「多縄文系土器」は、縄を器面に押し付けて縄文を作る場合と縄を回転させて作る場合とがあり、縄の大小、右撚り、左撚りなどの文様の区別があつて、多様である。草創期の終わるころ、土器の表面に限無く文様を施すようになって登場した。

◇つづく縄文早期は、約10,000～6,000年前で、日本列島は大陸から全く離れて島国となる。ドングリやクルミなどの堅果実は、栽培する農法によつて食料資源となった。狩猟用の弓矢も普及し、また漁労が活発化して貝塚が出現する。

「縄文早期」に志木市内で検出された遺構は・・・

「早期」の土器とされる「撚糸文系」として、夏島式と判断される土器が「新邸遺跡」で発見され（志木市史通史編）、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものであろうか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が「新邸遺跡」で出土した。また、「新邸・中道・中野・城山遺跡」からは、早期後半の条痕文系土器（主に茅山式）の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市域低地部への海水侵入が激しくなり、陸上と内海の双方で食料の獲得が始まり、人口が増加して、定住化へと向かつていたようだ（志木市史通史編）。

平成十八年（2007）の「中道遺跡」の調査で、早期末葉（条痕文系土器の時代）の住居跡一軒が、また、「田子山遺跡」では、早期の撚糸文系・沈線文系・条痕文系土器が出土した。その後の発掘で、「富士前」・「新邸」・「城山遺跡」から撚糸文系土器が数点出土し、「中野・田子山遺跡」では、炉穴に伴つて条痕文系土器が出土した。

### 縄文早期の土器の形式

「撚糸文系」は、撚り紐を丸棒の軸に巻いた原体（絡糸体）「絡」は糸をからめるを回転してつけたもの。原体を回転しないで、そのまま土器面に押圧した文様は絡糸体圧痕文と呼ばれる。

「撚糸文系土器」の標識遺跡の一つ、夏島貝塚は、神奈川県横須賀市夏島町に所在する縄文時代早期・初期の最古級の貝塚で、下層から出土した土器の一群には「夏島式」の名称が付けられ、「標式遺跡」となった。

また標識遺跡の稲荷台遺跡は板橋区稲荷台にある縄文早期の、そして稲荷原遺跡は、さいたま市見沼区春岡に所在する遺跡、また花輪台貝塚は、北相馬郡利根町にある縄文早期の遺跡として知られている。

「沈線文系土器」の沈線文とは、木、竹、貝などを引きずって、直線や曲線を描くもので、押捺おさなするときもある。沈線文系・「田戸下層式」土器の模様は、しの竹を半截してその割れ目で沈線を付けるものだが、「条痕文系」では、貝などの腹縁で土器の表面に条すじを付ける。

田戸遺跡は早期の田戸下層・上層式土器の標識遺跡で、神奈川県横須賀市田戸台に所在する。「田戸下層式」土器はユニークな形の尖底せんていをもち、また、丸底で口縁に小さな突起のあるものもある。

「条痕文系土器」は、縄文人が早期・終末のころにもたらした土器で、志木市内の各遺跡で発見されるのは、「茅山式」土器が主流を占めている。神奈川県横須賀市に在る「茅山貝塚」を標識遺跡とする基準土器で、多量の繊維を胎土たいど（土器本体をつくる原料、粘土や砂など）に含む「繊維土器」として知られる。

このころ（早期末葉）志木市内の縄文人の住み心地は良くなったようだが、丁度、市内の低地に海水の侵入が激しくなり、内海での食料の獲得が始まったからではないか、と推測されている。

条痕文系土器の分布は、柳瀬川右岸の台地全域に亘っていて、形式も揃っているが、住居跡・土坑などの遺構は発見されていない。そこで、定住するまでには到つてはなかったのではな

らうか。

◇約6,000～5,000年前の縄文前期には、気候の温暖化は進み、海水面は4～5メートル高くなる。既述したように（五頁）、「奥東京湾」が形成され、つづいて柳瀬川に「奥入間湾」が侵入する。内陸部に貝塚がつけられ、土器の数量は一気に増加して、平底土器が一般化する。

縄文「前期」に入って・・・

市内で発掘されるのは、「羽状縄文系土器」で、この系統の土器は、早期終葉の繊維を含む茅山式土器の延長線上に位置付けられている。

羽状縄文をつくるには、右捻り（ㇿ捻り⇨右ネジ）の捻り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり、縄目が平行に並び、左捻り（ㇿ捻り⇨左ネジ）の捻り紐を同時に、縦において横方向に転がすと右上がり左下がり、縄目が平行に並ぶ。これを同時に施文したり、順番に分けて鳥の羽のように縄文を器面に施文する技法、施文された状態が羽状縄文系土器の特徴である。

この土器群には、花積下層式、関山式、黒浜式が知られているが、何れも、土器をつくる胎土に植物繊維を混入させた「繊維土器」である。

「花積下層式」は、埼玉県春日部市の花積貝塚を、また、「関山式」「黒浜式」は、同蓮田市の関山貝塚、黒浜貝塚を標識遺跡とする土器群で、市内の「新邸遺跡」では、羽状縄文系の花積下層式土器が発見され、城山、中野、中道でも、条痕文系土器と重なって出土している。

「新邸遺跡」で発見された黒浜式の竪穴住居跡は、志木市内では最古のもので、縄文人の定住化が始まったのでは、と考えられている。住居跡には貝殻などが堆積しており、住居跡内貝塚として貴重な遺構であることが判明した。

また、「城山遺跡」では、関山式、黒浜式土器が発見されている。この遺跡の北側台地の端に「斜面貝塚」として残された「城山貝塚」については、すでに本紙の六頁に既述されているが、その付近から縄文前期後半の関山式ないし諸磯式土器（もろいそ）が出土しているので、これら時代にかけて形成されたと推測されている。

平成期になってからの調査でも、「西原大塚」・「新邸」遺跡から、また「城山遺跡」では諸磯式期の住居跡が検出された。「新邸」遺跡は貝層をもつ住宅跡である。

「諸磯式期土器」は、神奈川県三浦市・諸磯貝塚に由来し、その文様は竹管の半截・多截施文具によって付けられ、繊維は含まれていない。

◇約5,000～4,000年前は縄文中期に区分される。海岸線は後退して現在のそれに近くなり、縄文人の集落の規模は大きくなる。また、ドングリより食べ易い栗に変わる。

志木市内では、前期末から中期初頭にかけての数百年間の住居跡や集落の遺跡が確認されていない。そこで、繊維土器の時代に繁栄した縄文人の活動が衰退して定住することはなく、空闲地だったのでは、との推測もなされている。そのころ、志木市域は住み難い地域になっていた、ということになる。食料を求めて、容易に移動できるキャンプを設けていたか、と考える向きもある。但し、

縄文時代・中期半ばからの遺跡の発見は、市内で著しく増加する。

特に、中期中葉から後葉にかけて、勝坂式く加曾利E式期の遺跡にその傾向が強くなって、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で、多数の住居跡や土坑（人力で土を掘った穴で、性格が不明なもの）が検出された。

「西原大塚遺跡」では、平成二十四年一月までの調査で、百七十軒余りの住居跡が環状に配置していることが判明している。しかし乍ら、中期末葉からは遺跡の検出は激減する。現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が一軒確認されたのみである。

## 縄文中期の土器の形式として

「五領ヶ台土器」が知られている。神奈川県平塚市に在る「五領ヶ台貝塚」で出土した土器であるが、既に述べたように、この時期、志木市域の縄文人は移動していたらしく、居住跡の分布は乏しい。

中期後葉となると、遺構の発掘は増加し、「勝坂式」、「阿玉台式」、「加曽利B式」土器の分布が増大する。「勝坂式」は神奈川県相模原市の勝坂遺跡に、また、「阿玉台式」は千葉県香取市の阿玉台貝塚に、そして、「加曽利式」は千葉県若葉区の加曽利貝塚から出土した土器で、B式土器はB地点から、また後期のB式土器は同じくB地点から出土したものをいう。

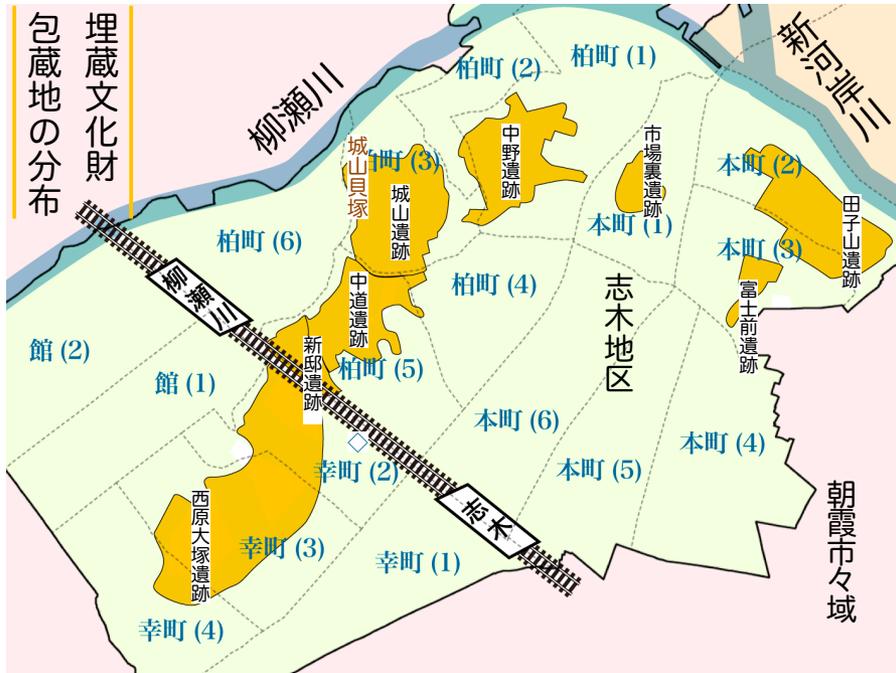
「勝坂式・阿玉台式」の土器は、縄文文様が少ないが、口縁部に突起を作ったり、表面に太い粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を模した把手などが付けられるなどの特徴がある。また、「阿玉台式」は、雲母などを含み、器面に輝きがあり、「加曽利B式」土器は、縄文と無文部分が区分され、単純化されている。

すでに十三頁に紹介した、北陸地方で顕著な「火焰土器」もこの時期に相当し、縄文土器

の装飾性の極致をゆくものである。

◇縄文時代後期は約4,000～3,000年前で、西原大塚遺跡から「堀之内式期」の住居跡二軒と「加曽利B式期」の住居跡二軒、遺物集中地点一ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成六年（1994）に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で検出された土坑一基があげられる。下層から「称名寺I式期」の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも二基の土坑が検出されている。

「堀之内式土器」は、千葉市の堀之内貝塚から、また「称名寺式土器」は、横浜市金沢区の称名寺貝塚に由来する。



◇晩期は約3,000～2,300年前で、気温は二度前後低下し、海面も低下して漁労活動は壊滅的な打撃を受ける。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行3C式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

◇日本列島の総人口は・・・

縄文時代には、人口は東国から北国に向かって、西国より多く、関東地方で活動していた縄文人の人口密度は、相対的には大きかったといわれている。

鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」（講談社学術文庫）によれば、縄文早期（～八千年前後）にはほぼ二万人だったが、同中期の最盛期、二十六万人まで増加したという。原始時代としては高度な狩猟採集をもつて暮し、限りのある空間を最大限に利用していたと考えられ、住居跡などから割り出すと、日本の人口密度は、狩猟採集で暮す社会としては、世界で一番高かったといわれる。

しかし、のち反転して後期に入ると、人口は一気に減少し、十六万人にまで落ち込んでしまう。

さらに、晩期には七万六千にまで減少した、という。住居の数、気候、その他の動静を調べ、人口の動態を推定することは至難の技であるが、以上のデータは、今日広く受け入れられている。

志木市域では・・・

縄文中期に始まった寒冷期が、後期から晩期に掛けて、さらに進行する。縄文時代の後期、晩期の遺跡は激減して、人の居住は無く、通過する縄文人もいなかったのでは、と推測されている。

但し、この頃九州北部や近畿地方では、水稻の農耕を中心とする生産社会が形成されつつ、弥生時代へと移行していた。その流れは東国に向かっていたのである。

一十 志木市内の埋蔵文化財の発掘が始まったのは・・・

昭和四十八年（1973）なので、すでに四十年余り以前のことになる。当時、市内の遺跡として僅かに知られていた「西原大原」の発掘の実行だった。

志木市の関係者は意気込みに溢れ、「志木市郷土史研究会」の会員、「朝霞高校」の生徒などにも助力を要請して、予想を上回る成果を挙げた。小さい範囲（30m×15m）の発掘調査だっ

たので、集落址の全貌を把握することは不可能だったが、縄文中期、古墳時代前期の住居跡が六軒発見され、その成果は、昭和五十年、「志木市の文化財第4集」として公刊された。

遺憾乍ら、その後、発掘調査は中断して、再開されたのは十年後のことになる。昭和六十年(1985)に、「城山」で大規模な集合住宅が計画され、五千平米を越える地域で本格的な発掘調査が実行された。文化庁に埋蔵文化財の発掘調査の届けを提出し、記録を保存するために「遺跡調査会」が編成された(成果は、「志木市遺跡調査会調査報告書第4集」として、1988年に公刊された)。

この調査ののち、発掘調査の件数と調査面積は一途に増加するようになり、平成期に入ると、年度内の遺跡調査件数は五十ヶ所、面積は弐万平米にも達し、しかも発掘調査は一層精密に行われるようになる。

### 一・十一 最近の詳細な調査・・・

平成二十三年(2011)に発掘調査されて刊行された『西原大塚遺跡第1・2地点埋蔵文化財発掘調査報告書』から、精密な調査を引用させて戴き、以下に例示する。

#### 西原大塚遺跡は・・・

今までの調査から、旧石器～縄文時代から、弥生・古墳・奈良・平安時代を経て、中世・近世まで、長い時代にわたる複合遺跡であることが判明していたが、特に、縄文時代中期の住居跡は180軒以上、また弥生時代後期から古墳時代の住居跡が500軒以上見つかっており、それぞれの時代の拠点的な集落だった。

今回報告された調査では、縄文中期の住居跡10軒、弥生後期から古墳前期の住居跡4軒などが見付かっているが、特に、縄文時代の第174号住居跡は、その構造、遺物出土状態や土層堆積状況とともに、住居の建替・拡張など、当時の人々の具体的な活動を知るための良い資料が得られている。

但し、調査地点の現況は畑地として利用されており、度重なる耕作痕(農作業で、幅が狭く、深く掘る「トレンチャー」の跡)によつて遺構は攪乱されていた。

しかも、縄文時代の遺構は、174号住居跡などでは、拡張された可能性が窺われる。

出土した位置の判明している土器・土製品は膨大な数にのぼり、実に5,903点と報告されている(うち五領ヶ台式1点、阿玉台式322点、勝坂式325点、曾利式263点、加曾利E式2,554点、連弧文306点、土製円盤14点、土器片錘10点、不明土製品2点、粘土塊2点)。なお、石器総点数は721点とつづ。まさに驚異的な数字と言わざるを得ない。

次号では、弥生時代、古墳時代に移って、市内、及び近隣を中心として、遺跡の数々を訪ねることしよう。

装飾された華麗な土器



埋蔵文化財を収蔵し、展示する・・・

志木市立埋蔵文化財保管センター

「縄文土器の展示コーナー」

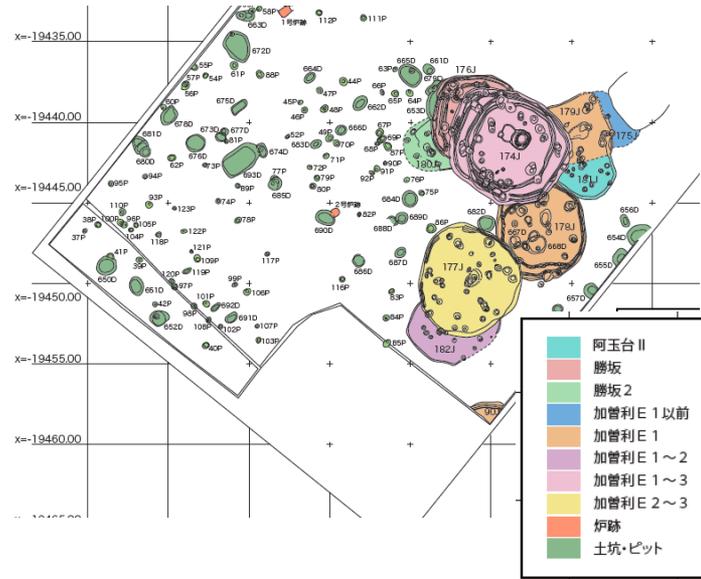




上空からの写真



縄文時代遺構の分布



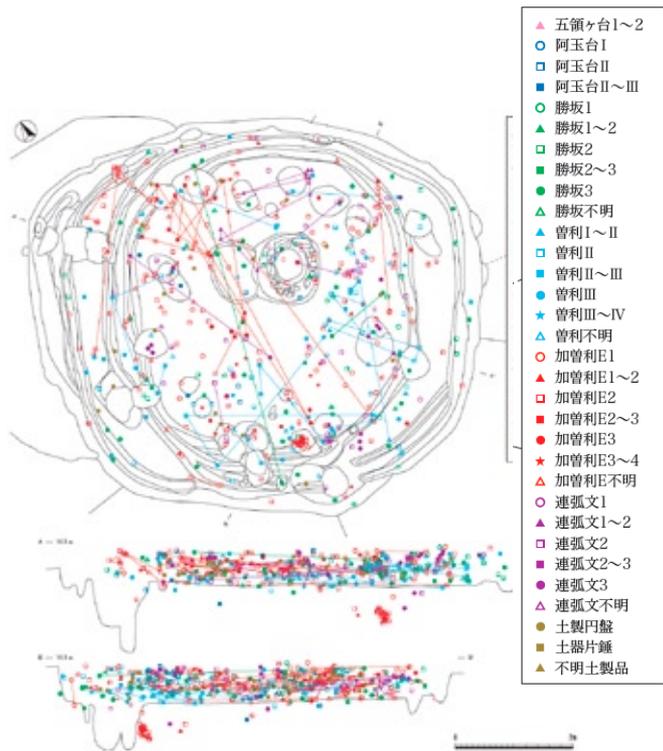
志木市立埋蔵文化財保管センター



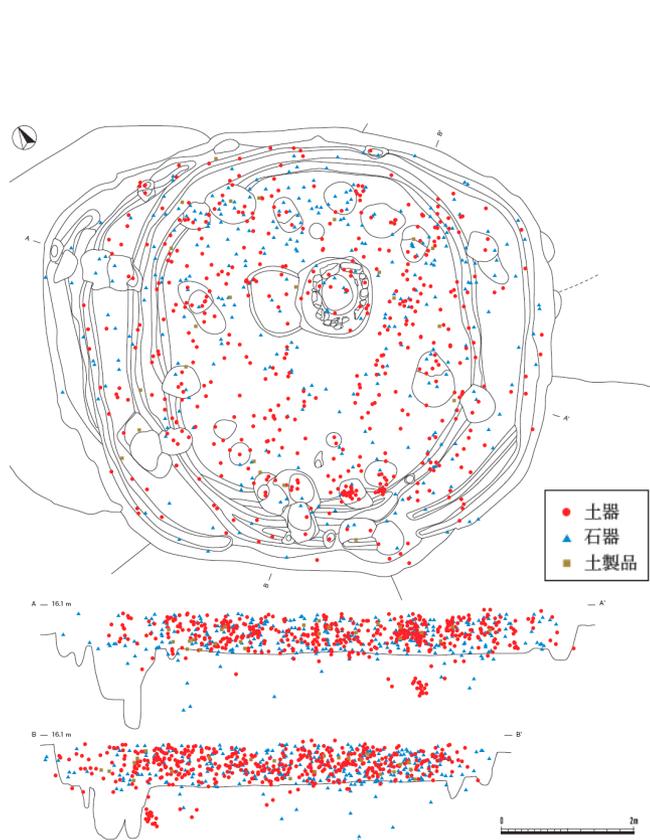
志木市柏町一丁目に所在

埋蔵文化財の収蔵と発掘調査の拠点施設として、平成二十二年オープンした

# 174号住居跡土器の出土図



# 174号住居跡遺物の出土図



## 関東の

## 縄文標式遺跡

## 草創期

- 橋立岩陰遺跡(埼玉県秩父市)
- ↓橋立一式、橋立二式
- 夏島貝塚(神奈川県横浜須賀市)
- ↓夏島式
- 井草遺跡(東京都杉並区)
- ↓井草式

## 早期

- 子母口貝塚(川崎市高津区)
- ↓子母口式
- 鵜ヶ島台遺跡(神奈川県三浦市)
- ↓鵜ヶ島台
- 茅山貝塚(横須賀市)
- ↓茅山下層式、茅山上層式

## 前期

- 花積貝塚(埼玉県春日部市)
- ↓花積下層式
- 関山貝塚(埼玉県蓮田市)
- ↓関山式
- 黒浜貝塚(埼玉県蓮田市)
- ↓黒浜式
- 諸磯貝塚(三浦市)
- ↓諸磯式

## 中期

- 五領ヶ台貝塚(神奈川県平塚市)
- ↓五領ヶ台
- 阿玉台貝塚(千葉県香取市)
- ↓阿玉台式
- 勝坂遺跡(神奈川県相模原市)
- ↓勝坂式
- 加曾利貝塚(千葉県千葉市)
- ↓加曾利凹式

## 後期

- 称名寺貝塚(横浜市金沢区)
- ↓称名寺式
- 堀之内貝塚(千葉県市川市)
- ↓堀之内式
- 加曾利貝塚(千葉市)
- ↓加曾利凹式
- 曾谷遺跡(千葉県市川市)
- ↓曾谷式
- 高井東遺跡(埼玉県桶川市)
- ↓高井東式

## 晚期

- 安行猿貝貝塚(埼玉県川口市)
- ↓安行式
- 真福寺貝塚(埼玉県さいたま市岩槻区)
- ↓真福寺式(安行3C式)
- 荒海遺跡(千葉県成田市)
- ↓荒海式
- 山武姥山貝塚(千葉県山武郡横芝光町)
- ↓姥山 $\alpha$ - $\beta$ - $\gamma$ - $\delta$ -式

最初に発見された  
「火焰型土器」

馬高三十稻場遺跡（長岡市関原町1丁目）は、信濃川左岸の段丘上にある縄文時代の大規模な集落跡で、東側に中期（約5000～4000年前）の馬高遺跡、西側に後期（約4000～3000年前）の三十稻場遺跡が位置している。「火焰型土器」は、馬高遺跡で最初に発見された。

左図は、馬高の「火焰型土器」



火焰型土器の特徴は・・・  
口縁部に付く鶏冠状把手と鋸歯状突起、原則として縄文を使用せず、隆線文と沈線文によって施された浮彫的な文様を持つこと、つぎに「部位の名称」を示す。



「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行